

国際セミナー「英国の地域福祉」公開講演会

イングランド南西部における農村地域社会開発

——特にグロースターシャーを取り上げながら——

室 田 信 一 翻訳

(社会学研究科社会福祉学専攻博士後期課程)

講師 ステイブーン・W・ライト、MBE, DMS

リジヨナル・ディレクター、SWAN

[The South West ACRE Network of Rural Community Council]

日時 二〇〇六年一月一八日(土)

場所 同志社大学新町キャンパス臨光館302教室

はじめに

この度、このような形で同志社大学の同僚にお会いでき、また、20年以上にわたり研究を通して関わってきた、長年の友人でありよき同僚でもある井岡勉教授を再度訪問することができ、大

変光栄に思います。今回のセミナーにご招待いただき、真にありがとうございます。また、会場にいらしている朋友にこのような形で再会できたことは、喜ばしい限りです。

一九九九年に来日した際には、「チミモト」という一インチもない小人についての小話をしたことで、混乱を招いてしまいまし

た。もし私が「一寸法師」について話していれば、もう少しわかりやすかったかもしれません。

今日は皆さんに別の小話をしようと思います。今回の小話はまだ私が若いころに、イングランドの西部に位置するグロースターシャーでおこった話です。昔、イングランドの王族が狩猟を行っていた森で、フォレスト・オブ・デインと呼ばれるとても素敵な地域がイングランド西部にあります。そこは、すっかり田舎で、外部から孤立していて、独立したいいくつかのコミュニティが存在します。ちよつと島根県の山丘地帯と似ているかもしれません。まるで、開拓精神と独自の方言を有する山岳地帯のようなものです。

私は、グロースターシャー農村地域協議会 (Gloucestershire Rural Community Council) についてすぐに、フォレスト・オブ・デインの、あるパブリック議会のホールで行われる会議に出席しなくてははいけませんでした。私は大学教授や地方自治体の職員ではなく、NGOで働いているというのを忘れないでください！当時、私はひどいボンコツ車に乗っていて、ちよつと前日に車のバッテリーが上がってしまいました。さらにその日、私は机の角で腕時計をおつけて壊してしまいました。会議に遅れそうだった私は急いで出かけようとしたのですが、案の定、車は動かなかったので、友人に頼んで直結でエンジンをかけ、何とか会議に向けて出発しました。

イングランド南西部における農村地域社会開発

どこに向かえばいいか、おおまかな方角はわかっていたのですが、ひとたびサヴァーン・リバーを越え、フォレスト・オブ・デインに入ったあたりで道を間違えたことに気がつきました。田舎道を進みながら、道に迷っていることだけでなく、会議の時間にすつかり遅れていることが気にかかってしようがありませんでした。しばらくすると、一人の年若い農夫が、放牧された牛を眺めながらゲートに寄りかかっているのが見えました。私は車を止めました。窓をおろして、「こんにちは」と声をかけました。農夫は振り返り「おう」と言いました。「すみませんが、今何時か教えてもらえますか」と、私は農夫に尋ねました。農夫は、再度振り返り私を見て「おう」と一言。私は待つことにしました。

私は車を降りて、農夫のところに歩み寄り「すみませんが、まもなく始まる会議に遅れているようで、もしお時間を教えていただけたら助かるのですが」と伝えると、農夫は再度振り返り私を見ました。このとき、私はまさに「一寸法師」と同じ気持ちになりました！そのうち、農夫はゲートの下のバーから足を下ろし、鍵をはずし、ゲートを開けて牧場に入っていきました。農夫は内側からゲートを閉じて、牛のところまで歩いていき、牛のお尻を軽くたたき、牛の横にひざをつきました。

農夫は、ずっと牛に語りかけていました。すると、農夫は左手をゆつくり差し出し、牛の左の鞆丸を持ち上げ、さらに上にあげ、やさしく元に戻しました。次に農夫は自分の重心を左ひざから右ひざに代えました。農夫は右手を差し出し、今度は、右の鞆

丸を持ち上げ、いつそうやさしく元に戻しました。農夫は依然、牛に語りかけています。そして、農夫は立ち上がり、私の立っていたゲートまで戻ってきました。

「六時半だなあ」と農夫は言いました。

私は、すっかり困惑して、混乱していました。「あなたは、牛の糞丸を持ち上げることで時刻が計れるといっているのですか？」とたずねると。

「おう。」

「これはとんでもないことだ。一体どうやって？」農夫は再び私を見て、向きを変えて牛の先にある丘の上の方に建っている教会を指差しながら言いました。「そりゃあ、簡単さ。牛の左の糞丸を持ち上げると、教会の時計の長針が良く見えて……」

私は農村の人々が大好きです。彼らはとても実践的で基本的に忠実です。世界中どこに行っても、同じことが言えます。ですから、私は心から自分の仕事に生きがいを感じています。

さて、私の仕事とは何でしょう。農村地域協議会 (Rural Community Council (RCC)) とは何でしょう？

二〇世紀初頭、グレース・ハドウ (Grace Hadow) という女性が、ヨーロッパで起こった第一次世界大戦終結後イギリスの農村地域から人がすっかりいなくなってしまうことに注目しました。一九一九年にオクスフォードシャーに住んでいた彼女は、オクスフォードシャーの農村に関係の深い教団体に声をかけて会議

を開きました。参加した団体は、カウンティ議会 (County Council)、イギリス農民協会 (The National Farmers Union)、労働者教育協会 (The Workers Education Association)、オクスフォード大学構外教育部 (the Extra Mural Department of Oxford University) など、彼女はオクスフォードシャー農村協議会 (Oxfordshire Rural Council) なるものを創立しました。彼女がしたかったことは、このカウンティの農村コミュニティで行われる活動のコーディネートを試みることで、最良の支援を提供したかったのです。それは、助言や、情報、教育やトレーニング、ホールや公園のようなコミュニティスペースなど、とにかく住民の生活水準を高めるものなら何でも良かったのです。特に、ヨーロッパの戦場で失われてしまった多くの技術力の穴を埋めるためにトレーニングは必要でした。

三〜四年後の一九二三年、オクスフォードシャー・ディストリクトに隣接するグロースターシャー・カウンティ議会 (Gloucestershire County Council) の代表がホドウ氏を招待しオクスフォードシャー農村協議会 (現在のオクスフォードシャー農村地域協議会) の活動について講演するように依頼しました。彼女の講演は一九二三年の二月に行われました。講演にすっかり感動したグロースターシャーの住民は、彼女の例に習い、グロースターシャー農村地域協議会 (GRCC) を創設しました。GRCCは三カ月後の一九二三年五月三日に独立した慈善団体、つまりNGOとして設立されました。私は、一九八四年四月から二〇〇六年六月ま

での二二年間 GRCC の事務局長として勤めてこられたことをとても幸運に感じています。正確には、一九八〇年にスタッフォードシャー地域協議会の事務局長に任命されて以来、農村地域協議会「家族」の一員となりました。

今日、三八の RCC が存在します。それぞれの呼称は異なり、コミュニティ・アクション (Community ACTION) や、コミュニティ・ファースト (Community FIRST) など、他にもイングリッド全土を対象とした組織である ACCRE (Action with Communities in Rural England) に習い、サフォーク ACCRE などの名称で知られている団体もありますが、これらは全て農村地域協議会として認知されています。

今、例に挙げました ACCRE は、一九八六年に国内全土を対象とした独自の団体として設立されました。それまで私達は、ロンドンにある全国ボランティア団体協議会 (National Council for Voluntary Organisations (NCVO)) の「後見」を受けていました。

みんな多様であるという視点からも、私は「家族」という言葉を使って自分たちを表現することが好きなのですが、そうした同じ「家族」の一部であっても、議論をしたり、関心が崩れたり、また復活したりします。結局、私達は違う団体だけど、でも同じだということですよ。我々は同じ問題に対して働きかけますが、それぞれが、それぞれの地域のニーズと今までの活動背景に合わせ

イングリッド南西部における農村地域社会開発

て、事業を展開します。これらの判断は地方政府やその他の法的部門との関係によって大きく変わります。つまり、どの団体が何をしているのか、そして、もちろん、他のボランティアセクターがこの地区で何を行っているかということも重要です。ボランティアセクターという言葉は、イギリス国内で、私達のような団体を指して使われますが、住宅協会からコミュニティ・エンタープライズまで広く指すことから、だんだんと多くの人の混乱を招き、最近では「サードセクター」という言葉のほうが頻りに用いられます。

そんな私達みんなに共通していることがあります。それは、他の団体の対人 (個人・グループ) 援助を支援することです。つまり私達は皆、地方開発エージェンシー (Local Development Agencies (LDA)) にあたります。私達は皆、カウンティのホールを支援、組織し、法および財政に関する情報提供を行い、助成金の申請手続きを支援します。

私たちは、かつてイングリッド行政区の最小単位であるパリッシュやタウン議会のカウンティ協会に事務局職員を配置していました。例えば、村の公園管理協会 (Playing Fields Association) や高齢者福祉委員会 (the Old People's Welfare Committee) (現在の Age Concern) やその他の多くの団体です。なかには精神疾患に苦しむ人たちのためにサポートネットワークを作ったり、若者支援を行ったり、移動手段を提供する団体もありました。例えば、トレーニングや出勤のための移動手段として、モペッド (ペダル

つきバイク) やスクーターを若者に貸与したり、高齢者の通院手段として、ボランティア運転手を組織したり、などです。最近では多くの団体がICTやコンピュータに関するトレーニングを提供しています。利用者が技術を身につけて、よりいい仕事を得るための支援ならば何であれ行っています。

例えばGRCCではグロースターシャーのコッツウォールド(Coswold)・デイストリクトでLiteracy(識字)およびNumeracy(生活に必要な数学的識字)を向上させる事業を行っていました。二〇〇年に行われた全国調査で、イギリスの稼得年齢層の二四%が基礎的なLiteracyおよびNumeracy能力に欠けているということが明らかにされました。これに準じてグロースターシャーで行われた調査で、コッツウォールド・デイストリクトに関しては、この数字が二九%まで上昇していることが明らかになりました。何かの対策が必要であることは一目瞭然でした。GRCCはソーシャルインクルージョン事業のための助成金を受けることができました。人々を(社会的に)包含するために、LiteracyとNumeracyの能力を高めること以上に良い方法があるでしょうか。その他の団体や機関はこの特殊な助成事業に応募することはできませんでした。つまり、この助成事業が私たちにとっての「てこ(交渉のための道具)」となったわけです。これはサードセクター(NGO)にとって、とても重要なことです。そうでもなければ、地方当局や法制的機関は我々に対して対等に接しないでしょう。

私たちの役割は、大学などのトレーニング供給者による活動をコーディネートし、村のホールを会場として確保することでした。当然、対象者を見つけ出すことも私たちの役割でした。これがそう簡単にはいきません。そこらの村人に歩み寄り、「あなたは読み書きできますか?」と聞くことはできません。それではあまりにも無頓着過ぎます。村人たちは自分たちの「無力」を隠す術を知っています。読み書きのできない人は、文字として書かなくても、ものすごい記憶力で人から聞いたことをすべて覚えてしまいます。私たちは、村人が自分たちの問題に気がつくように、学校や村のお祭りで、コンピュータを使った楽しいゲームを催しました。政府は全国で一大広報キャンペーンを行いました。これはLiteracyやNumeracyにおける問題を「グレムリン」と呼び、自身に内在する「グレムリン」に気づくように働きかけるものでした。これらのキャンペーンは主として子供を持つ親で、子供の宿題を手伝いたくても手伝うことができない人たちに向けて行われました。私たちが行ってきた事業の中で大成を取めたもので、子供が習っている新しい数学の教育方法を保護者に教えるためのクラブを作るといふものがありました。親が自分たちの子供を助けるための能力を身につけるといふことです。

ここで、なぜこの事業を行った団体が、GRCCというNGOでなくてはいけなかったのか疑問に思うかもしれません。二つの理由を挙げることができます。第一に、私たちは、そうした支援を必要としていた人たちにアウトリーチする技術を持っていまし

た。大学が行うようなありがちな宣伝ではこの事業の対象者の心をつかむことはできませんでした。

第二に、この事業は新しいアプローチを必要としていました。

グロスター (Gloucester) やサイレンスター (Cirencester)、イヴシャム (Evesham) などにある大学は、村の住人にとって通学圏外でした。高ター10マイルほどの距離ですが、車の運転ができなかったり、交通機関へのアクセスがなかったりすると10マイルが100マイルのように感じるものです。大学側は生徒に通ってもらうことしか考えていませんでした。しかし私たちは違いました。私たちは、教師こそ生徒のところに行くものだと考えました。面白いことに、これが最初の問題点となりました。イギリスの生涯学習の先生の多くは個人経営で、彼らが授業を教える時、「契約時間」に対して均一の賃金が支払われていましたが、移動時間や準備の時間もこの均一の賃金内で支払われました。つまり、旅費手当ては申請できても、「移動時間」の賃金に関しては申請できませんでした。私たちは、村の集会所でクラスを開けるように準備していましたが、先生たちは片道一時間かけてそれらの集会所に通わなくてはならず、そう簡単な話ではありませんでした。そこで、私たちはいい解決方法を思いつきました。それは、先生たちの旅費を払うただけに資金集めすることで、これによって、問題は無事解決しました。他にも、クラスを継続して行うためには、最低でも二人の生徒がいなくては成り立たな

イングランド南西部における農村地域社会開発

いという問題がありました。農村コミュニティでは、そうしたやさしいことではありません。そこで私たちは、クラスを「初めての人のためのICTクラス」として、より多くの人の参加を得ました。また、そうしたことで、LiteracyやNumeracyの問題を抱える人たちが、自分たちの問題をさらけ出すことなく、恥ずかしい思いをせずにクラスに参加することができました。

イングランドには、以前の農村エージェンシー (Countryside Agency) の後継機関で、農村地域委員会 (The Commission for Rural Communities) という機関があります。この機関の代表はスチュアート・バージェス (Stuart Burgess) さんで、彼は、イングランドの農村における深刻な問題を政府に対して申告する農村アドボケイト (Rural Advocate) として首相から任命されています。

バージェス氏は、先日発表された、彼の最初の報告書で以下のように述べています…

「私にとって最も印象的なことは、現在、イングランドにおけるどの農村地帯も、激しい変化を経験していると言うことである。それは歴史的に見ても、たいへん根深い変化であり、今、農村地帯は前例のない試練と、内部と外部からの圧力を受けていると言える。このような逆境にもかかわらず、これらの課題に立ち向かう農村地帯の人々の底力には、私は圧倒される。ローカル・エンタープライズや、地域力、活性化などの話を聞く一方で、都市を中心とした政策決定が彼らの生活を妨害し、障害となっているという苛立しい話も耳に

する。」

まるで日本で起こっているように、農村から若者が減少してきます。彼らは職や、住居を求め、また、農村以上の暮らしが待っていることを信じて、都会に移り住んでいきます。しかし、日本と違うことは、ミドルクラスの中年層が「豊かな田園風景を求めて」、大量に農村地帯に移り住んでいる事です。

バージウス氏は続けます・・

「農村での暮らしはいまだに豊かな田園風景が残っていて、ワーズワースからコンスタブルまで多くの作家や画家から愛されている。

イングランドの農村地帯における生活の質は、多くの人にとって大変良いもので、それは農村地帯が受けるひとつの評価である。しかし同時に、農村地帯に住む多くのマイノリティの生活は、不利な立場や、貧困、排除など、社会的に認知されない問題で阻まれている。」

まさに彼の言っていることは正しいのです。今日、イングランドの農村では、五世帯に一世帯が国の貧困線である年収一五、〇〇〇ポンド（約三四〇万円）以下で暮らしているのです。また、廉価な住居の慢性的な不足や、主要なサービス利用の困難さ、トレーニングや職業安定所へのアクセス困難などの不利な条件は、農村の問題に関連しています。

それでは、こうした問題に対して何ができるでしょう。

はじめにすることは、問題の大きさを測ることです。

もし多くの人が世帯年収一五、〇〇〇ポンド以下で暮らしているとしたら、住居の問題が表面化します。イングランドの南西部は、ロンドンを除くイングランドの中で、最も高級な住宅地のひとつになりました。そこにおける住宅相場は一对八くらいで、さらに高騰しています。一对八と言うのはつまり、世帯年収の八倍ほどの相場と言うことです。

例えば、グロースターシャーにおける物件の平均的な価格は現在一八万ポンド（約四千万円）です。アビー・ナショナル（*Abey National*）というUKで二番目に大きいモーゲージ会社の一月初旬の発表によると、アビー・ナショナルはモーゲージの貸付基準を年収の五倍に設定しました。つまり、世帯年収が三六、〇〇〇ポンド（約八〇〇万円）必要と言うことです。農村地域の二〇%の人たちにとっては、年収の二倍以上に当たります。これは、人々が五倍（価格の五分の一）の年収を稼ぐことができると仮定した上でのお話です。多くの金融機関は三・五倍、よくて四倍に設定していますが、これはますます悪化する傾向にあります。何度も言いますが、これに対して、私たちは何ができるでしょう。

過去二年間、私は地域土地信託（*Community Land Trust*）と言う新しい運動に参加しています。これは、UKにとっては新しいものですが、スカンジナビア（北欧）では長年にわたり定着しています。私たちは現在、「グロースターシャー・ランド・フォー

・ピープル」(Gloucestershire Land for People)という地域土地信託を開設しました。これはどのようなものでしょうか。

とてもシンプルです。不動産を購入するときに何が一番高くつきますか。

それは、土地です。

もし、不動産から土地の値段を引いたら、おそらく最高で六割くらいの減額になるでしょう。つまり、総額の四割になるということです。

それでは、地域土地信託はどのように機能するのでしょうか？
いたってシンプルです。まず、政府の部署や管轄機関と交渉し、政府所有の土地を土地信託に「譲ってもらう」、または我々に有利な価格で売ってもらいます。そうして得た土地を、土地信託が地域を代表して無期限に「保有する」ことになります。

そうすることで、「レンガとモルタル」の値段で住居を建てることができます。そうして建設した住居は、市場価格では家を購入することが困難であるという条件を満たしている人に分譲されます。

ここで、家を建てるのに六万ポンド(約一、三五〇万円)かかるとします。そこで、仮に若い夫婦(二人の合計年収二万四、〇〇〇ポンド(約五四〇万円))が購入を希望しているとします。彼らがこの物件の三分の一に値する、一万ポンド(約四五〇万円)分を購入するとします。彼らが八年間そこに住み続けたとして、物件全体の価値が二割の一、二、〇〇〇ポンド(約二七〇万

円)上がったとします。これは、我々の利益となります。

すると、この物件は七万二、〇〇〇ポンド(約一、六二〇万円)の価値になりました。若い夫婦が購入した二万ポンド(全体の三分の一)の価値は、二万四、〇〇〇ポンドまで上がったことになりました。

しかし、この八間に夫婦の年収も上がり、物件全体の半分まで購入できることになりました。そうすると、この夫婦の所有している資産価値は三万六、〇〇〇ポンド(約七二〇万円)ほどになります。

誰にでもこのような話が当てはまるとは限りませんが、この夫婦にとって、自分たちの家を所有することは夢でした。そして、その夢も現実となりつつあるわけです。

皆さんの中には「政府がどのように簡単に土地を譲ってくれるものだろうか」と疑問に思われている人がいらっしゃるかもしれません。私が言えることは、私たちの土地信託は一八年前に余剰人員から閉鎖された病院の約八エーカーにわたる跡地を、今年の一月までに保有できるかもしれないと言うことです。そこには、七二棟の住宅、地域保健福祉センター、野菜の自主栽培などのための分割農地が約二〇区画、他にも子供のための安全な遊び場も作る予定です。なぜこのようなことが？なぜなら、地域に必要としている労働者(先生、看護師、消防士)に対して家を供給するには、何かを「与える」事で成立すると言うことを、政府が

イングランド南西部における農村地域社会開発

認め始めているからです。今回のケースでは、それがハエーカーの土地と言うわけです。

それでは、どのようにすればこのようなことが達成できるのでしょうか。まず、信頼を築くことが重要です。地域において、住民があなたの話を聞いてくれるような信頼です。

先ほども言いましたが、私が説明した計画は二年間以上の期間を経て進められてきました。私たちは、地域で住民懇談会を開き、アンケート調査を実施し、フォーカスグループを開き、パリスシュの議員と会議を開き、地域が本当に求めているものを明らかにするために数々のことをしてきました。すべては難しいにせよ、住民から挙げられた要求をなるべく多く満たせるように努めてきました。

そもそのコンセプトとして、私たちは九棟の建物とより狭い分割農地の開発を考えていましたが、住民はより少ない家とより多くの農地を求めています。さらに、保健センターと子供の遊び場を求めてきました。私たちは本来、三階建ての集合住宅を考えていましたが、住民は最高でも二階建てまで、さらにより多くの家族向け住居を求めてきました。私たちは、これらにより多くを満たしながら、さらに排水処理や節電など環境問題に配慮したデザインを整備しました。住民はさらに古くなった病棟を残すように求めましたが、閉鎖されてから一八年経った病棟は改修するには危険すぎると言うことで、あきらめました。しかし、病院の廃材を新たに建設予定の地域保健センターに再利用するように

考えています。

また、私たちは開発予算の一部を利用して、その土地の歴史的遺産を記録できるようなコミュニティ・アート、地域歴史事業を立ち上げることを考えています。

多くの人のおかげで、営利目的の開発業者では得ることのできないような信頼を地域住民とパリスシュ議会から得ることができました。なぜなら、地域土地信託は住民の“信託”を得ることで、地域のための土地を保有できるからです。私たちは、営利目的でその地域の開発を行っているわけではありません。確かに、一定の剰余を出すことで、不動産の整備を行えますが、こうした剰余金は開発計画を進行するために、または同じ目的で別計画を進行するために投資されます。

こうした事業はUKにとって新しいことですが、あくまでも、農村地区の住民ニーズを満たし、彼らにとつて購入可能な住居を開発するための、ひとつの方法にしか過ぎません。

しかし、どのようにして住民のニーズを発掘するのでしょうか。私が一九九九年にここで話したときは、村や地域における、住民自ら作る質問票を利用した評価のあり方について話しました。地域のボランティアの努力によって達成される、この素晴らしい活動について、私が最も残念に思うことは、公的機関がほとんど関心を示さなかったと言うことです。よって、私たちは次のステップに進みました。

私たちは現在、ヘパリツシユ・プランン^①に関してより広く、全体的な考え方を示しています。一九九〇年代の後半、私たちの中で様々なアイデアを出し合っていました^②が、二〇〇〇年の一月、当時の新労働党が農村白書を公表しました。この政府の方針によると、イングランドにおける第一層^③の行政単位であるパリツシユ議会が報告の議論の中心となりました。これには、パリツシユ議会およびタウン議会における質の基準に関するコンセプトも盛り込まれていました。これは革新的な出来事でした、中でも議会における有能なクラークの常駐義務と言う基準は、多くのパリツシユ議員を不安にさせました。私は、これを好意的に受け止めています。長い間、議会におけるクラークの役割は認識されていませんでした。実際、私が過去二五年間に渡り働きかけてきたことのひとつが、クラークの役割を明確にしようとしたことでした。一九八五年に、現在のグロースターシャー大学と協働で、全国的に認知されるようなクラーク養成講座を始めました。嬉しいことに、この講座は、いまや国の優良機関として認知されています。先週の金曜日に、大学の卒業式に出席し、卒業生たちが資格と卒業証書、学位を受け取るのを見てきました。学校を離れてから正式な訓練を受けたことの無い、普通の男女ですが、彼らは、パリツシユやタウンにおけるクラークとしての役割を通して、自分たちの地域を良くしようと考えています。すべてのクラークがこのように考えているとは言いません。私が言いましたように、多くのクラークは政府の介入と称して反対の考えを身につ

イングランド南西部における農村地域社会開発

けています。

有能なクラークを有することは、質の高い議会となるための四つの条件の一つです。二番目の条件は、議員全員が選挙によって選ばれた議員ではなくはならないということです。議員全員が選挙で選ばれたかを確認するなど、おかしな話と思う人も多いと思います。イギリスでは、四年間の年期的間にパリツシユ議会またはタウン議会で空席が出ると、二つの方法で後任を決めます。必ず選挙を行うと言うわけではありません。

議会における空席は、必ずパリツシユの公共掲示板で告知される必要があります。有権者は一日以内に欠員を埋めるための選挙の必要性を訴えます。一〇人の有権者が選挙運営委員に選挙の依頼文を提出した時点で、公式な選挙手続きが開始され、選挙が行われます。しかし、誰もこの期間中に選挙の必要性を訴えないと、パリツシユ議会が独自の採決で新たなメンバーを選びます。中には一人の議員も選挙で選ばれていない議会もあります。このようにして民主主義の名は廃れていくわけです。そこで、政府は各議会に対して、高い質の議会として認証されるためには、議員すべてが選挙で選ばれなくてはならないという条件を提示しました。何度も言いますが、私はこれを当然のことだと思えます。私は議会に対して、以下のように言います。「もし、真面目な地方公共団体としての認知されたいのなら、そのように振る舞いなさい。」

三番目の条件は、有権者に対してニュースレターを配信し、議

会が何を行っているか、誰が議員で、どのようにして連絡を取るか、いつどこで議会が開かれているかといった情報を住民に対して発信することです。とてもわかりやすいことで、このようなことは、どの議会でも行っているものと思われるでしょう。それが違うのです。

長期にわたり、数多くの地方議会で、市民の代表が議員に会うということがありませんでした。議員たちは自分たちが行っていることを誰にも伝えてきませんでした。その結果、誰も議会に対して微塵の興味を持たず、議員の存在にすら気がつきませんでした。つまり、政府は、議会の質確保のための基準を通して草の根からの民主主義を改善させようと試みているわけです。

四番目の「テスト」(条件)は議会が頻繁に行われることを担保すると言うものです。イングランドの地方自治法 (Local Government Law) では、パリッシュおよびタウン議会は年に四回議会を開くだけでよいのです。そこで、新たに設けた議会の質基準では、年六回議会を開くことを要求しています。

実際には、パリッシュの質を高めるための要求はほんのわずかなもので、私が見る限り、とてもそれらが要求であるとは思えません。しかし、この計画が公表されてから五年の間に、そのコンセプトをもとに分化や反発が生まれています。それまで高い質を保ってきたパリッシュはこの計画を賞賛し、そもそも出遅れていたパリッシュは、いっそう質を下げました。このような結果となつた最大の理由として、パリッシュが質を高めるためのきつかけ

不足が考えられます。

きつかけは、誰にとっても必要なものです。白書の中で、政府は、パリッシュを良質だと認めるときに、プログラムの一環として、カウンティや、単一地方当局 (Unitary)、ディストリクトなどの基礎自治体はその憲章の中に、パリッシュとどのような連携や保全の関係を築くか具体的に明記するように約束しました。こうしたプロセスの中で、この憲章は、一般的に基礎自治体がどのようなサービスを提供できるかを簡条書きにするものでした。また、より具体的には、他にどのような追加サービスが良質のパリッシュを形成するかを示すものでした。これがきつかけとなるはずでした。しかし、いくつかのケースを除いては、未だ達成されていません。結果としてパリッシュは「なぜ、わざわざ苦労するのだろう。結局いろいろ試みても、最終的には我々には何の見返りも無いではないか」と言っています。

さて、ここであなたは何故私がこれほど多くの時間を使って、地方政府に関する話をしているのだろうと不思議に思っているかもしれません。なぜなら、私はパリッシュ及びタウン議会に対して情熱的な信条を持っているからです。潜在的に、パリッシュ及びタウン議会は地方民主主義の本質といえますが、変化を必要としています。そこには、一層の責任感とダイナミックスが求められています。もし議会が、本来持ち得る力を理解し、それを使いこなすことができるなら、地方の有権者に対して本当の変化を及ぼすことができるのは、まさしく地方議会なのです。

彼らは単独でそれを成し遂げることはできませんし、個別にそれを実行することは不可能です。私にはとてもよくわかるのですが、彼らの不満は、基礎自治体からほんの少しの支援しか受けていないことにあります。私が言うところの「受容の気風」というものが無いのです。私はあくまでも一般論を話しているわけで、例外はあるものですが、つい先日出版された「地方政府白書」(二〇〇六年一〇月)によると、中央政府はパリツシユやタウン議会さらに地域コミュニティへの地方分権について書いています。これは私の個人的な視点ですが、政府は今回の白書の中で、単一地方当局の新設を進めなかったことで、地方政府の構造を転換する根本的な機会を逃したといえます。第三層の地方政府を存続させることは、ディストリクトやカウンティ議会がお互いの陰に隠れ、物事が進まないときにはお互いを批判し合えるような土壌を永続させただけではないでしょうか。重複を奨励し、効果的な協同や活動を減少させただけです。これらのことは私たちの地域を何一つ改善してくれません。特に、多くの第三層構造が農村地帯に存在することは、農村地域社会開発にとつては有益といえませんし、パリツシユにとつての「受容の気風」を、または一分ほど前に私が話していた地域の住民主体で進める計画を、作り出すことになりません。

それでは、ヘパリツシユ・プランとは何でしょうか。事実ここでは、パリツシユに限った話ではないので、「地域主導計画」

イングランド南西部における農村地域社会開発

(Community Led Plans) としましょう。地域主導計画は、コミュニティ自身が、綿密に、深く、広範囲に及びコミュニティを見つめることです。この計画は全体性があります。別な言葉で表現すると、乳幼児から母親、児童から高齢者、ソーシャルケアまで生活における一つ一つの点に着目しているということです。重要なことは、「コミュニティ自身」で行うということです。つまり、それは基礎自治体などの部外者や、私が働いていたグロースターシャー農村地域協議会のような団体によって策定される計画とは違うということです。確かに私たちは住民を助け、助言を与え、事あるごとに、また必要ときには住民を励まし、時には方向性を示します。しかし、本当の意味での成功とは、すべての活動は地域によって行われ、進められるべきなのです。これがどれほど重要なことか、何度繰り返ししても足りないほどです。もし、地域がその活動をすべて担ったときに、導き出される結果も地域のものとなるのです。

しかし同時に、ディストリクトやカウンティといった自治体がプロセスに加わる必要があります、そうしなければ、彼らは自分たちが排除されたと感じてしまうでしょう。そして仕返しに、地域主導計画によって出された結果を、利害関係の無い個人の集合体によって挙げられた「要求リスト」として、却下するでしょう。つまり、私たちは一つになって「受容の気風」をつくりださなくてはいけないのです。その状態は勝手に起こることではありませんし、何も無いところに起こることもありません。

そうした「受容の気風」づくりを後押しするために、私は先日、イングランドの南西部で二日間に渡る会議を開きました。ここでは、ローカルレベル、カウンティレベル、広域圏レベルでの参加主体が、地域主導計画のプロセスにおけるそれぞれの役割と責任に関する合意、つまり「協定」を結ぶために集まりました。

多くの地域主導計画が策定されながらも、決して高い評価を得ていない状況において、参加主体が会議を通して合意形成を図ることは不可欠となりつつあります。基礎自治体職員や会議メンバーにとりて、地域主導計画を進めているグループの努力を、「素人」であるとか「非科学的」「地域相談協議 (community consultation) の標準を満たしていない」などと抽象することは容易いことなのです。

この会議は基本的に一般には開放されませんでしたし、さらに三部に分けられ、それぞれの会議には、選ばれた代表者のみが参加しました。最初のグループを「反映役 (Reflectors)」と呼びます。彼らは、まさに今起こっている現状について、何が良くて何が悪いのかを反映する人たちです。このグループは主として、草の根で地域主導計画に携わっている策定委員などで、農村のイネーパー (enablers) と言えます。(ここでは、地域に派遣された地方政府や国の機関の職員など地域で活動する人を指しています。) 二番目のグループを「橋渡し役 (Bridges)」と呼びます。彼らは、反映役が伝えることを聞き、彼らが去ったあと、三番目のグループである「受容役 (Receptors)」へ内容を伝えるよう働

きかけます。この最後のグループの役割は重要です。彼らは、政策立案者や、行政の機関、事務所、省庁の責任者などです。この会議は、私が求めている以上の成功を収めたと言えるでしょう。政府の省庁から少数の代表者しか参加しなかったことは、とても残念でしたが、私が数分前にお話した、地方政府の将来像に関する白書が、長年にわたる遅延の後、ようやく発行されることとなり、大臣や文官は忙しかつたのだと思います。

それでは、この会議の結果はどのようなものだったでしょうか。なかなか面白いものでした。地域のグループの代表は協定に対して好感触を得ることができました。しかし、そこに「歯」が生えていければの話です。別の言葉で言いますと、より実用的なものにできたのではないかと言うことです。地方政府職員は協定によって自分たちの支配力が弱まるのではないかと心配でした。そして、その代表者たちは協定に対して好意的な者と対立的な者に二分されました。協定に対して断固反対していたものは、すでに協定どおりに仕事を行っているから、必要ないと考えていました。

面白いことに、人が何かに反対するとき、彼らはもうすでにそれを行っていると考えるものですが、実際には、彼らこそがそれを怠っている張本人なのです。もし彼らがそれを行っているとしたら、自分たちの専門性を共有したいという理由から、反対しないでしょう。人間とは興味深い生き物です。私たちは皆、自分こそが重要であるという皮をかぶって生きているのです。

会議の最終結果については、来年の三月に同じメンバー（又は多少の増員あり）で集まり、南西部協定を結ぶための進捗状況を報告するときに改めて話し合われます。

しかし、何よりもすばらしいことは、中央政府省庁の間で、地域主導計画の重要性に対する理解が深まってきていると言うことです。「しかし、二〇〇〇年に発行した白書でその考えを提示したのは、中央政府自身だったのでは？」という会場の皆さんの声が聞こえてきます。「確かにそうでしょう、しかし、政府が言うことと、実際に行うこととの間には、常に大きな違いがあるものです」と私は言いたいです。しかし、私が申しましたとおり、現在、政府の中で地域主導計画の重要性に対する理解が深まってきています。このことについて、ちょっと立ち止まって考えてみたら、当然のことなのです。中央、地方に関わらず、どの政府の部局であれば、地域相談会を通して七五〇八五〇の回答を得ることができるとでしょうか。地域主導計画では、常にそれくらいの回答率を得ています。基礎自治体は、地域の住民の相談に乗り、参加を促して行政計画を立てるように、中央政府から支持されています。したがって、地域主導計画の価値に対する評価はますます高まっています。その結果、地域コミュニティにとって良い結果が導かれるのであれば、私は何も言うことがありません。

さて、この話をどのようにまとめましょうか。二〇〇六年の農村グローブスターシャーパーにおけるコミュニティ・デベロップメント

イングランド南西部における農村地域社会開発

・ワーカーの役割とは何なのでしょうか。私にもう少しお付き合いください。ここで、八三年前に戻り、グローブスターシャーパー地域協議会発足当時の話をしたいと思います。それが、チャリテイ組織であったことを覚えておいてください。チャリテイ組織であるためには、一七世紀に作られた、とても古い条件を満たさなければなりません。チャリテイ組織としての活動条件は以下のうち最低一つを行うことでした…

- ・ 貧困の救済
- ・ 教育の提供
- ・ 宗教の推進
- ・ レクリエーションの促進

そうですね、この条件はかなり広範囲に及んでいました。条件を満たすには、これらすべてを行う必要はなく、一つ以上を行えばよかったです。例えば、グローブスターシャーパー農村地域協議会は貧困の救済を行っていたのでチャリテイ組織としての条件を満たしていましたし、教育の提供やコミュニティ全体にとって有益な活動などがその仕事のほとんどでした。

ここで、ちょっと私たちの団体について話しておく必要があるように思います。一九二三年の起源についてはお話ししましたが、今日、私たちの団体は一八人の主要なスタッフからなります。（うち四人はパートタイム又はジョブシェア）一六人の理事がいて、うち四人は外部組織から任命されます。それらの組織のうち

イングランド南西部における農村地域社会開発

カウンティ議会から一人、ディストリクトの議会を代表して一人、グロースターシャー・パリッシュユおよびタウン議会協会から一人、そしてグロースターシャー女性協会連合から一人です。私たちの一年間の活動予算は約八〇万ポンド（約一億八、〇〇〇万円）で、契約や、カウンティ・国の省庁（DEIRA: Department of Environment Food & Rural Affairs）の最先機関からの事業受託、会費、寄付、協賛などからなります。私が事務局長だったころ、自分の勤務時間の少なくとも二〇％は、将来の活動資金集めに費やすようにしていました。

過去三〜四年間、私たちは自分たちの経営方針を劇的に考え直すなければなりませんでした。中央政府はボランティアセクター及びコミュニティセクター（今日で言うところのサードセクター）に関する綿密な再評価を設け、これにより将来的には助成ではなく契約が主となることが明確となりました。ここで言う契約とは、中央及び地方政府のために一端を担い、サービスを提供するということです。つまり、私たちにとって、チャリティ組織としてのルーツ、つまり私たちの倫理的な枠組みを失わない一方で、商業的な手法を取り入れることが重要となりました。このことは、当時も現在も、私たちがただのコンサルタントとなってしまう危険性ははらんでいます。しかし、私たちは理事やスタッフの専門性を發揮することで、地域との信頼関係を危険にさらすことなく、年々成長するような我々独自の総合活動プログラムをつ

くりだすことができました。

私たちは主要な活動プログラムを以下の四点に絞り込みました・

- ・ 地域主導計画
- ・ エンタープライズ
- ・ 社会的排除
- ・ 調査

まず、最初の地域主導計画に関しては十分にお話したと思います。あえて付け足すことがあるとすれば、地域が行う事業が繁栄するように、地域と行政と密接に付き合い、先ほど説明した、受容の気風をつくりだすということだけです。私たちは、地域に対して、まず自分たちに着目し、地域におけるすべての関係機関との綿密な話し合いと連携を通して、将来の活動計画を立てるよう働きかけます。この活動計画は、協会から学校まで、若者から高齢者までのすべての人たち、ビジネス、娯楽、住居、観光、ショッピング、交通など生活に携わるすべての側面を含むことが重要でした。現在私たちは、地域に対して、自然環境の変化に注目し、たとえ小さな地域の中でも何かしらの変化を与えることができるのではないかと、話し合っています。

国の財政政策における権限が中央政府から地方政府へと委譲する中、このような活動がどれほど重要か、またこれからますます重要になるか、いくら述べても足りないほどです。イングランドの各カウンティで、地域エリア協定（Local Area Agreement）を

含む地域戦略パートナーシップ (Strategic Partnership) 関係が築かれつつあります。これに向けて政府と合意を形成するためには、多くの関係機関からその目標に対する支持を得る必要があります。そうした合意が、地域のニーズを行政職員が拾い上げたものではなく、地域主導計画といったパブリックの情報とデータを基に形成されたのであれば、地域住民は、まさに地域が求めているものを、戦略に反映することができそうです。

エンタープライズ

サードセクターの団体が生き残りをかけて商業的にならざるを得ないように、地域コミュニティに対しても同じことが言えます。村民にサービスが供給されていた時代はもうとくに過ぎてしまいました。農村の人々にサービスを提供する施設の撤退や閉鎖はますます進んでいます。最近では農村の学校が二年間に渡る抜本的な見直しのなか、危機的狀態にさらされており、現在は農村の郵便局がその対象です。私は、農村の小学校の見直しに、いい加減うんざりしていることをここで白状します。戦後のベビーブーマーは年を重ね、学校に通う年齢層の子供の数がすっきり減ったことは事実です。しかし同時に、教育委員会はクラスの規模を縮小するように求めます。学校を閉鎖して合併が進むと、クラス規模は増大し、生徒の移動距離や孤立の問題も深刻化します。私たちは登下校の移動距離を延ばし、地域から学校を奪うことで、地域の心を奪ってしまっているのです。

イングランド南西部における農村地域社会開発

私たちは恵まれている方で、グロースターシャーの私が住む村には学校があります。この学校のおかげで、私たちの村には、数多くの子供づれの家族が住んでいます。これは地域にとって、大変良いことです。もしその学校が無かったら、過去この村に引越してきた6家族はおそらく越してこなかったでしょう。きっと学校のある別の村に引越してしまっただけでしょう。そうすると、私たちは子供に囲まれることも無ければ、お店も閉店休業、村はすっきり貧しくなっただけでしょう。

すると、学校でさえも商業的である必要があります。学校は、両親が共働きで、しかも家からはるか離れた職場に通勤しなければならぬといった、今日の社会における課題に答えられるようであればなりません。そのような親は、子供を学校が始まる時間の前からあずける必要があります。多くの学校は「朝食クラブ」を設け、こうしたニーズに対応していますし、放課後には「放課後クラブ」を設け、親が仕事帰りに子供を迎えに来るまで安全にあずかっています。もし学校がこのようなサービスを提供していないかつたら、親は、自分の働く街の学校に子供を通わせません。

面白いことに、授業外の時間に児童の相手をする新たなスタッフが必要となり、こうした事業によって、村におけるパートの仕事の機会が増加しています。この問題に関しては、フランスから多くを学ぶことができるでしょう。

仕事の話になりましたが、現在私たちの村や小規模な町における最も深刻な課題は就労先の不足です。かつてはイングランドの農村における基盤であった農業も、今やGDPの5%以下、全国民の4%以下の労働力にしか当たりません。私たちの村の、我が家を含む多くの家屋は、一七世紀から一八世紀にかけて、ストラウド・バレー (Stroud Valleys) の羊毛工場で働く織工のための小屋として建てられたものです。現在、羊毛工場はもうありません。以前は地元の木を材木にしておく材木置き場がありました。したが、現在そこでは、加工された壁パネルや、あずまややデッキのための緑色ガーデン木材を東ヨーロッパから輸入しています。地域の郵便局の危機的状況について話しましたが、私たちの村の郵便局も「薄皮一枚」で生き延びている状況です。もし政府が現在行っている、農村の郵便局ネットワークに対する補助金を削減したら、イングランド南西部の八〇〇近い郵便局の閉局が予測されます。また、それらの郵便局はただの郵便局ではなく、村の商店も兼ねているため、両方の機能が村から失われることになります。それでは、私たちに何ができるのでしようか。

最初にすることは、人々にもっと商店を利用するように促すことです。しかし、そうするためには、店主に店の経営方法を変えてもらう必要があります。人々が朝早くに村を出て、夜遅くに帰るとすると、朝九時から夕方五時までの営業時間では開店している意味がありません。もし、客のニーズを無視して店を経営していたら、客は他の商店を利用するでしょう。重要なことは、商業

的な視点を取り込み、商店を生き生きと開かれたものにするということです。しかし、もし商店が閉店となり、誰も引き継がないとしたら、別の方策を提案する必要があります。現在、地域が管理し経営する商店が次々と生まれていますが、そのような商店を継続して運営することは、ボランティアの力に依存せざるを得ません。もし誰かを雇うことになると、収支のバランスが合わなくなってしまう。

興味深いことに、村の商店でようやく出てきた良い話としては、地元の産物に対する関心が再び高まっていることです。私たちは、地域の商店をまわり、新鮮な野菜などの地元の産物を取り扱うよう促し、さらにそのことを宣伝するように言ってもらいました。

しかし、それでは不十分なので、私たちはこの村に、何とかして多様な雇用を生み出し、そうした活動が熱狂的な保護貿易論者であるNIMBY¹⁾によって妨害されないよう必死なのです。実は、これに続く別の略語がありまして、BANANA (Build Absolutely Nothing Anywhere Near Anything) と言いますが、「こちらを使ってもいいと思います。もし私たちが健全でバランスの取れた村を求めるとしたら、住宅や、雇用、清潔で安全な環境における余暇などの面で充実した村が必要なのです。私たちは商業、地域どちらのエンタープライズも応援する必要があります。そして、村の地域資源を活用し、地域生活を充足させるものに育て上げる必要があるのです。

ソーシャルインクルージョン

ソーシャルインクルージョンについてはすでに Literacy と Nu-meracy、購入可能な住居という二点についてお話ししました。雇用もそのうちの一つです。人々が生活を支えるだけの賃金を得ることができれば、それなりの住居を得ることができますし、読み書きができれば、良い仕事を得て、生活水準を高めることもできるでしょう。これはとつても危険なサイクルなのです。今回の講演のはじめに、モベットのレンタル事業を通して、若者の就労訓練や雇用を支援している農村地域協議会があるという話をしたと思います。ですが、実際のところ、この事業は若者限定ではなく、六五歳までの就労年齢層すべてが対象です。

ここで、私たちが支援したある一人の女性について話したいと思います。彼女の名前をジョーンズさんといいます。

ジョーンズさんが五〇代の中ごろだったとき、彼女のご主人は、重い病気にかかり、予期しないうちに突然亡くなりました。彼女は相当なショックを受けました。ちょうどその頃、彼女の息子は地元の会社からリストラされ、新しい職場に通うために、家の車を運転して通勤しなければなりません。ジョーンズさんは最も近い商店のある町から一〇マイルほど離れた孤立した村に住んでおり、公共の交通機関も無く、息子が車を使っているため、車も無い状態で、彼女はすっかり孤立し、うつになりました。まもなく、彼女のうつ状態は悪化し、精神科のケアホームに

通所するために、救急車を利用して送迎してもらう必要があります。こういった費用に加えて、彼女は失業者保険と、毎週二〇〇から三〇〇ポンド以上の「政府の出費」である、特別稼働不能扶助(生活保護)を受けて暮らしていました。

幸いであつたことは、デイセンターのスタッフや、私たちが運営するジャンプスタート (JUMPSTART) のチラシを彼女に見せたことです。ジャンプスタートとは、モベッドを貸すことで就労を支援する事業のことです。ジョーンズさんはジャンプスタートを担当するスタッフに連絡を取り、彼はジョーンズさんと面会しました。そこで明確となったことは、ジョーンズさんに就職先さえあれば、彼女の精神状態はすぐにでも改善されるということでした。これは、デイセンターのスタッフのおかげです。そこで、そのスタッフは、ジョーンズさんが仕事を見つけれられるよう、最長六ヶ月まで彼女にモベッドを貸すことにしました。

五〇代半ばのこの女性は、特別な技術を持つわけでもなく、トラウマを抱えるような過去一二月を過ごしてきたことを思い出してください。

ジョーンズさんは週刊新聞の求人欄を丁寧に探し、その中に、一〇マイル離れた町のホテルで、受付のパートを募集している広告を見つけました。ジョーンズさんは、息子が家にいる土曜日に面接の約束をとり、結果的には、自力で通勤できるようなら、雇ってもらえることになりました。

三年ほど前、私がジョーンズさんを最後に見たとき、彼女はす

イングランド南西部における農村地域社会開発

つまり健康でたくましくなり、初めて会ったときから見違えるようでした。それ以上に興味深いことは、彼女が収入を得て、税金を納めていたということです。つまり、カウンティの負担となっていた彼女が、今はカウンティにお金を納めているのです。社会的にも経済的にも排除されていた彼女が、今は社会復帰を果たし、社会に貢献しているのです。

他にもこのような話や、低額住居への移転などの方法で支援したケースを挙げるすることができます。農村地域社会開発を成功させるためには、スラム街ではなく、バランスの取れた社会であることが必要不可欠です。私たちは、包摂的でなくはいけません。そして、私は、可能な限り村民が生活の質を手にいれられるよう保証することこそが、私たちの仕事の真の目的であると信じています。

こうした活動事例は、私が先ほど南西部ACREネットワークに関して説明した中の、七つの中の農村地域協議会でも見ることができます。残念なことに、私は現在、現場における第一線の仕事から足を一歩引きました。これは、広域圏で仕事をするための代償と言えます。いったい何が私にこの決断をさせたのでしょうか。

二つ理由があります。

最初に、私は農村地域協議会（RCC）が進める農村地域社会開発という取り組みを心から信じています。RCCの活動がいつ

そう発展するように支援したいと思っと思っていますし、そのために私にできることは、資源と財源を増やすよう努めることだと思っています。

次に、広域圏の政策に影響を与えることは重要な仕事と思っています。

イングランドの広域圏において、“選挙で選ばれた議会”は存在しませんが、七割が広域圏内の地方当局からなる、“選挙以外で選ばれた議会”は存在します。この七割は、“地域の政治地図”を反映するために、各地方当局から代表一人と、数名の任命を受けたものによって構成されます。残りの三割は、広域圏における幅広いネットワークの中から、社会、経済、環境における共同者として選出または任命されます。例えば私は、南西部の同僚たちによって選ばれた、四人いるボランティアおよびコミュニティセクターの代表者の一人です。南西部広域圏議会は、代表が選挙で選ばれていないこともあり、多くの人にとって民主的で無いように聞こえるかもしれませんが、その重要度を増しています。政府は、この議会を広域圏における計画当局として位置づけました。また、この議会は、中央政府によって進められる道路および鉄道網の推進や、住宅の配置などの事業予算の優先順位を決定する役割も果たします。この議会の影響力は毎年強まり、その役割はより重要となってきました。つまり、その戦略的な考えに影響を与えるために、私たちは代表となっているのです。

私は、広域圏における経済戦略に影響を与えることもまた、私

の役割のひとつと考えます。私たちは、この議会が農村の経済を十分に評価し活性化させてきたと、今日まで信じていません。私は定期的に、広域圏の中央政府代表である、広域圏行政事務所と会議を開きます。よって、私は同僚の支援者という役割と、イギリス南西部に存在する一、七〇〇の農村地域を代表して議員に働きかけるという役割を兼ねているのです。

話をまとめましょう。私達の未来はどこにあるのでしょうか。私は、人々の生活を変えようという強い意志を持つ地方政府の堅実かつ、ダイナミックな第一層にこそ私たちの未来があると信じています。結局のところ、大規模な戦略的部局は、実際に戦略的になるには忙しすぎるものです……いや、少なくとも忙しくあるべきなのです。

しかし、こうした国の事務を達成するためにも、中央政府は、変化の過程を通過し、単一地方部局という統一されたシステムをつくるか否かを決めるために、苦しい思いをする必要があると、私は信じています。大変不満に満ちた現在の状況では、単一部局、カウンティ、ディストリクトがそれぞれに存在しており、これはすでに存続不能で、公に対して混乱を生み出しています。また、それは重複や無駄を生み出しています。

これに対して、第一層で仕事をする地方政府の職員が、彼らの抱える試練に対して向き合うことも求められます。彼らは試練に対する準備ができていますのでしょいか？いくつかのケースに関し

イングランド南西部における農村地域社会開発

て言えばそうかもしれませんが、かなり多くのケースに対してはNoでしょう。繰り返しますが、No“なのです。もし仮に、これは高望みな“もし“になりますが、基礎自治体における状況も申し分なく解決され、私が言い続けている受容の気風をつくり出す事ができたとき、もしかしたら、パリッシュやタウンの選挙に、人々が列を作るほどの関心を導くことができるかもしれせん。ひとたびその突破口さえ開けば、ボールは転がりだし、勢いは後からついてくるでしょう。その時に私達は、変化が起こったという事を確認し、新たな人々が参加するという状況に到達するのです。

地方政府は、長すぎるほど中央政府による支配の対象となり、地方当局は、長すぎるほど地域コミュニティの情熱を無視し続けてきました。しかし私には、かすかな変化と分権に向かう意志が窺えます。

サードセクターに関してはどうでしょうか。主体的に意志決定を行い、さらに、自分たちの求めている事をただ聞いてもらうだけではなく、相手に確実に行動をとらせるような技術を学べるよう、草の根における情報や技術の提供、つまりはキャパシティ・ビルディングこそが、コミュニティ・デベロップメント・ワーカ―としての私達の役割と考えています。

それが達成できたなら、関係づくりや連携強化という残りの部分をどうするかは、地域コミュニティ次第です。地域が（住民によつて）保持され繁栄するためには、地域の活動はその土地に根

イングランド南西部における農村地域社会開発

ざしたものである必要があります。それと同時に、中央政府や地方政府、その他当局や機関、そして、民間セクターを支え、民間セクターに支えられるサードセクターが、地域を育成し支援しなくてはならないということです。

しかし、最終的には、地域コミュニティが運転席に座っていないことはなりません。(J)

〔謝辞〕

本稿は、科学研究費補助金基盤研究B「地域福祉の国際比較―日韓・東アジア類型と西欧類型の比較―」プロジェクトの一つ、国際セミナー「英国の地域福祉」公開講演会提出論文を翻訳したものである。この翻訳に当っては、同プロジェクト研究代表者井岡 勉同志社大学社会学部教授および研究分担者山本 隆立命館大学産業社会学部教授のアドバイスと校閲をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

注

- (1) Information Communication Technology の略
- (2) この場合、Countryside と Rural の間に特別な違いは存在しない。
- (3) ここでは、第一層をバリッシュおよびタウン、第二層をディストリクト (District)、第三層をカウンティ (County) および単一地方当局 (Unitary Authority)、第四層をリージョン (Region) とする。
- (4) ここで言うところのクラークは、バリッシュおよびタウン議会における事務の責任者であり、本来英語の Clerk が意味する書記や

事務員以上の任務を果たす。小さなバリッシュおよびタウンでは、パートタイムのクラークがひとりですべての事務を行い、大きいバリッシュおよびタウンではフルタイムのクラークが部下数名を管理する。

- (5) Not In My Back Yard の略で、「必要なのはわかるけど」私の裏庭ではやらないで」と言う考え方や、そういうった考え方を持つものに対して使われる。